

1サムエル記 27 章 1 節 「落胆した時」

アウトライン

1A 主の真実

1B 長い圧迫

2B 堅忍

3B 恐れ

2A 肉の力

1B 自分への語りかけ

2B 自分の計り事

3B 待てない神の時

3A 敵の領土

1B 不信者との交わり

2B 一時的な解決

3B 悪循環

1C 嘘

2C 兄弟へのつまずき

本文

サムエル記第一 27 章 1 節を開いてください。午後は 25 章から 27 章までを学んでみたいと思いますが、今朝は 27 章 1 節に注目してみたいと思います。

ダビデは心の中で言った。「私はいつか、いまに、サウルの手によって滅ぼされるだろう。ペリシテ人の地にのがれるよりほかに道はない。そうすれば、サウルは、私をイスラエルの領土内で、くまなく捜すのをあきらめるであろう。こうして私は彼の手からのがれよう。」

私たちは今、ダビデの生涯を学んでいます。彼は、神のみこころにかなった人と呼ばれ、神はダビデを高く評価されていますが、それはダビデが完璧であったことを意味していませんでした。ダビデは、サウルの手から逃れるために敵の領土に行くことに決めました。27 章から 30 章までに、信仰が後退しているダビデの姿を読みます。27 章はその始まりであり、彼が主なる神に留まることをせず、自分で自分を救おうとしてしまいました。

1A 主の真実

私たちは前回の学びで、サウルの手からダビデが逃げていたところを読みました。どんな困難な状況になっても、神は真実な方であり、必ずダビデを救ってくださいました。例えば、サウルが岩一

つを挟んでダビデを追いまわしている時に、ペリシテ人がイスラエル領に入ってきたという知らせをサウルは家来から受けました。そしてダビデがエン・ゲディの洞穴に隠れていた時に、その洞穴にサウルが入って来たのです。それでもダビデは手を下すことをせず、サウルを逃しました。

そして話は再び繰り返します。サウルは再びダビデを追跡するのです。再び同じことが起こりました。サウルがぐっすり眠り、家来たちもその回りで眠っている時に、ダビデと部下がサウルの槍と水差しを取ってきたのです。再び神は、ダビデに真実を示してくださり、サウルの手から彼を救ってくださったのです。

1B 長い圧迫

しかし、彼は今読んだように、サウルによって自分が滅ぼされると思ったのです。それで、イスラエルの敵であるペリシテ人の地に逃れるという大きな過ちを犯しました。どうしてサウルからずっと救われていたのに、ここに及んでサウルに滅ぼされると思ってしまったのでしょうか？むしろもっと自信を持って、イスラエルの地に留まっていようとは思わなかったのでしょうか？

私は何となく分かります。長いこと圧迫の中に生きていると、精神的また霊的に疲れが出てきて、自ら危険なところに入ろうとする自暴自棄的な思いが出てきます。現代イスラエル、いや世界の中で名を残したスパイに、エリ・コーヘンという人がいます。彼はシリアの政権中枢部に侵入し、閣僚にまで選出されるのではないかと言われた人です。当時は、シリアとイスラエルは緊張状態にあり、事実、1967年に六日戦争が起こりました。エリ・コーヘンはシリア人も特別な人しか入れなかったゴラン高原に入ることができました。そして、シリア兵の塹壕にユーカリの木を植えると良い、そうすればイスラエルから塹壕が見えにくくなるだろう、と勧めました。そこで、彼は本部に通信して、「ユーカリの木が植えてあるところに塹壕がある。」と伝えたのです。六日戦争のゴラン高原におけるイスラエルの圧倒的勝利には、エリ・コーヘンがもたらした情報に拠るところが大きいのです。

シリア人はエリを全く疑いませんでした。けれどもエリはある時から、本部への通信において大胆になってきます。もっと慎重にならなければいけないのに、大胆になってきたのです。それでしばらくして、KGBの設置した技術によって通信機の見つけ、それでエリは捕えられたのです。エリ・コーヘンは長いこと二重生活という心理的圧迫の中で、全く正体が暴かれていないのに、自ら暴いていこうとする自暴自棄な思いがあったのではないかと思います。

同じような人が聖書の中に出てきます。預言者エリヤです。彼はバアルの預言者450人と対決します。祭壇のいけにえに火をつける神が本物であるという対決です。バアルの預言者は、気が狂ったようにバアルの名を呼びました。けれども夕暮れになっても何も起こりませんでした。エリヤは、そこに水を注げと命じました。祭壇もその回りも水浸しになりました。そしてエリヤはイスラエルの神の御名によって祈ったのです。そうしたら主から火が下って、水も完全に干からび、いけにえも全く焼き尽くされました。それでエリヤは、その預言者を殺すように命じました。それにも関わら

ず、エリヤはイゼベルのたった一言の怒りの言葉に恐れをなし、なんとほるか南にあるシナイ山にまで逃げていったのです。そして自分の死を願ったのです。主がそのように大勝利をもたらしたにも拘らず、落ち込んでしまったのです。

2B 堅忍

もし私たちに与えられる圧迫や試練が、短い期間のものであれば、主が自分を救ってくださるという約束を堅く信じることができます。けれども心に疲れが出てくる時に、その主のすばらしさと慈しみから目を離してしまうことがあります。エリヤのように、「ああ、私はもう死んだ方が良いでしょう。」と絶望的になってしまうことがあります。あのパウロも同じでした。ヨーロッパへの宣教を主に示されて、ピリピ、テサロニケ、そしてベレヤ、それからアテネ、コリントへと行きました。数多くの人々が救われたのにも関わらず、同じように反対者も多くいました。コリントにいた時に、彼はこのような状態です。「あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました。(1コリント 2:3)」継続的な心理的圧迫が、数多くの働きの中で受けていきました。

キリスト教の歴史に残っている世界的に有名な人物も落ち込みを経験しています。宗教改革者ルターも落ち込みました。奥さんはユーモアのある人で、ルターが落ち込んでいる時に真黒な服を着たそうです。そして、「あなたの姿を見ていると、葬式にでも行くのではないかと思いました。」こう言って励ましたそうです。英国の説教家であるスポルジョンも、落ち込みを経験しています。

ここで私たちが必要なのは、「堅忍」であります。堅忍という日本語はあまり使わないので難しいと思います。広辞苑には、「しっかりと耐え忍ぶこと」とありました。英語は“perseverance”です。聖書で使われている時は、重いリュックをもってしっかりと歩いているような意味合いがあります。ダビデの逃亡生活は、当然ながら神の救いと奇蹟の連続でした。目に見えるものによって神の御業を認めることができました。けれども、数々の神の御業を見ていると、その目に見えるものによってかえって惑わされて、最も大切なものから目を離してしまうのです。それは、主との個人的な関係です。親しい関係です。外側では大きな事が起こっているのですが、内実の方が大事なのです。

パウロがローマ 5 章でこう言っています。2 節から読みます。「またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいきます。そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。(ローマ 5:2-5)」恵みによって、信仰によって導き入れられて、神の栄光を見て喜んでいきます。けれども、それだけで終わるのではなく、患難が次にやってきます。けれども患難は患難で終わりません。自分のうちに忍耐が培われていくのです。そして忍耐するだけではなく、その忍耐の中で練られた品性が生み出されます。そして練られた品性は、揺らぐことのない希望を生み出します。そしてその希望は、聖霊からの神の愛によって支えられていくのです。

3B 恐れ

ダビデは、明らかに自分の心に恐れが入るのを許してしまいました。サウルが自分を襲ってくるだろう、という恐れがいつも自分を襲いそうになっていた時に、彼は主に叫び求め、そして主はそれに全て答えてくださいました。事実、ダビデ自身がこう告白しています。「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。(詩篇 23:4)」それにも関わらず、恐れを許してしまいました。恐れは畏になります。「人を恐れるとわなにかかる。しかし主に信頼する者は守られる。(箴言 29:25)」

パウロは若い牧者テモテにこう言って励ました。「神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。(2テモテ 1:7)」キリスト者として信仰を持っていること自体が、霊の戦いです。さらにテモテは、牧会者として反対してくる者たちに対応していなければいけませんでした。彼はもともと気弱な性格だったようです。パウロは実際的な助言として、胃のために、また度々起こる病気のために少量のぶどう酒を勧めています(1テモテ 5:23)。ストレスが体内にも及んでいたのでしょうか。けれどもパウロは、与えられた聖霊はその恐れを克服させてくださることを教えています。聖霊は、力の霊です。私たちの福音、十字架につけられたキリストは私たちに力がなくとも、その恵みによる力を与えてくれます。そして聖霊は愛の霊です。愛は恐れとは正反対です。恐れは、私たちは神の教会に対しても、またその人に対しても良い行いをするのを控えさせます。けれども愛は、惜しみなく与えることを控えることはありません。そして聖霊は慎みの霊です。主が恵みによって自分に与えられていること以上のことをするのを制してくださいませ。

2A 肉の力

1B 自分への語りかけ

それでは、本文を見てください。「ダビデは心の中で言った。」と言っています。これまでダビデは、主に願い求めていました。自分の心の中で決めることはありませんでした。私たちが神を心から締め出して、自分自身を相手にして語り始めると危険です。自分の悟りに頼っているからです。

パウロは、「絶えず祈りなさい。(1テサロニケ 5:17)」と言いました。祈るのですが、断続的に祈っていくのです。祈りは必ずしも、目をつむって、頭を垂れる時だけだと限りません。この前、仕事をしている時に意識的に主のことを考えないではないですか、という質問を受けました。確かに、目の前の仕事をこなしている時に私たちが目をつむって祈っているような祈りはできません。ダビデもペリシテ人と戦っている時に、目をつむって祈ったりせず、むしろ戦いに集中していました。

けれども、ネヘミヤ記を読んでみてください。ネヘミヤは、ペルシヤの王の献酌官でしたが、王の許可を得て、エルサレムの城壁再建の監督になりました。彼は王に、なぜそんなに悲しんでいる

のか？と尋ねられて、先祖の町が廃墟になっているからと答えましたが、「では、あなたは何を願うのか？」と問われて、こう書いてあります。「そこで私は、天の神に祈ってから、王に答えた。(ネヘミヤ 2:4-5)」彼は、王との会話の最中に、心の中で王を目の前にして天の神に祈りました。こうした祈りを継続的に行うのであって、自分の心の中で決めてしまう休憩の場所は私たちクリスチャンには存在しません。

2B 自分の計り事

そしてダビデは、自分で計画を立てました。「ペリシテ人の地にのがれるよりほかに道はない。そうすれば、サウルは、私をイスラエルの領土内で、くまなく捜すのをあきらめるであろう。」ダビデは恐れが心に入るのを許し、そのために主に語らず自分自身に語りかけました。それから、自分で計画を立てたのです。

ここで大切なのは、計画を立てること自体が間違っていることではないことです。実に、神がご自分のかたちに人を造られたのは、この地を支配するため、つまり管理することでした。計画を立てることなくして、管理し、支配することは決してできません。計画は神から与えられた賜物、いや使命であります。けれども、ここでの問題は主に拠り頼むことなく自分自身で計画を立てたことです。

多くの方がこの点で悩みます。自分の立てている計画が、はたして主の御心にかなっているのかどうかを悩むのです。これも原則は同じです。祈ってください。そして計画を立ててください。そして立ち止まってください。また祈ってください。そして他の兄弟姉妹の助言を聞いてください。そしてまた祈ってください。そして計画してください。箴言の言葉をいくつか紹介します。「人は心に計画を持つ。主はその舌に答えを下さる。(16:1)」「あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。(16:3)」「密議をこらさなければ、計画は破れ、多くの助言者によって、成功する。(15:22)」「人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。(19:21)」主は、私たちの計画に関わることに興奮を覚えておられます。主ご自身が私たちをご自分の作品にしたいと願っておられます。祈り、そして計画を立てていることに自身を持ってください。そして、計画を立てつつ、いつでもそれが主によって変更になるというへりくだりを持ってください。

3B 待てない神の時

そしてダビデが拙速な判断をしていることに注目してください。「私はいつか、いまに、サウルの手によって滅ぼされるだろう。」と言っています。「いつか、いまに」というのは新共同訳では「このままではいつか」となっています。英語ですと、「speedily」となっており、いつでもすぐに、という訳になっています。

サタンは常に、「今得なければ、その機会はなくなってしまうだろう」と私たちに迫ってきます。ちょうどイエス様にサタンが、「これらの世の栄華を、あなたが私を拝めば、すべて与えよう。」と言ったようにです。肉の欲望は常に、私たちの必要を今満たしてあげると約束します。結婚をしていない

男女が共に寝てしまうのは、その一体感を今得たいと思っているからですが、その後になんてなるかを教えてください。勤勉に働けば、主は必ずその労働を祝福してくださるのに、ギャンブルや宝くじなどで一貫千金を得ようとしてしまいます。けれども、主はいつもご自分が由とした時に事を行われます。私たちは、「待つ」ことの喜びをもっと知らないといけませんね。待つことによって、私たちの内に品性が練り上げられていくのです。

3A 敵の領土

1B 不信者との交わり

そして拙速な判断をした結果、どうなったでしょうか？ダビデとその一行は、敵の領域に入ったのです。敵の領域にいること自体は、それが戦いならば当然ながら問題ありません。けれども、敵の領域にいながらかつ平和に暮らしているということは、世との妥協があるからです。世の中にいるということ、世と交わるのには大きな違いがあります。「不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。(2コリント 6:14)」キリスト者は皆、世にいながらにして世から聖め別たれたものです。

私たちは、試練に遭うときに誘惑に遭います。問題から逃れたいので、かつての古い解決法を選ぶ誘惑があるのです。淋しい時、辛い時にお酒を飲んでた人が、またお酒を少し飲んでしまいます。仕事で辛さを紛らしていた人はまた仕事に没頭します。けれども、それが「少しだけ、一時期だけ」で終わらないのが現実です。そこは、引き返す道がなく、泥沼の中に入っていきます。

2B 一時的な解決

本文の続きを読みますと、彼らがペリシテ人の地に移住したら「サウルは二度とダビデを追おうとはしなかった(4節)」とあります。うまく行きました！そうですね、私たちが主を呼び求めることなく、肉の力によって動いた時に、一時的には問題が解決するのです。それはまるで、深刻な病気にかかっているけれども、その治療を拒否して痛みだけ取り除く薬を飲み続けるようなものです。即効で効果が表れます。けれども問題は解決されるどころか、むしろ深刻にさせるだけなのです。私たちはとかく、「うまく行っているから良いではないか？」と言います。いいえ、目的が達成できれば、手段を選ばないのは神の方法ではありません。

3B 悪循環

そして、ダビデは悪循環の縄目に捕えられました。

1C 嘘

ダビデはペリシテ人の王アキシュに、ガテではない離れた町に住まわしてくださいと願い出ました。そして、ダビデは虐殺を働きます。ダビデの住んでいるツィケラグという町はイスラエルの南部にありますので、その周辺にいたアマレク人、ゲシュル人、ゲゼル人などを殺していきました。略

奪して、女子供も含めて虐殺したのです。理由は簡単です。一人でも生き残れば、ガテのアキシュに伝える者が出てくるからです。私たちが嘘をつけば、その嘘を隠すためにこのように多くの罪を犯します。そうしないとつじつまが合わないからです。

2C 兄弟へのつまずき

そして 28 章に入りますと、アキシュがイスラエルと戦に行く時に、なんとダビデはそれに喜んで従おうとしていることです。イスラエル人を殺さなければいけないところに、自ら進んで行って行ったダビデの姿を見ます。もうここでは、ダビデは罪を犯して自分自身が何をやっているのか見えていなかったのでしょうか。罪は自分が何をしているのか見えなくさせます。

そして私たちが罪を犯すと、ダビデがイスラエルと戦おうとするように、兄弟たちをつまずかせることになるのです。テサロニケの人々に対して、パウロがこう指導しました。「各自わきまえて、自分のからだを、聖く、また尊く保ち、神を知らない異邦人のように情欲におぼれず、また、このようなことで、兄弟を踏みつけたり、欺いたりしないことです。(1テサロニケ 4:4-6)」自分自身は、自分だけの問題だと思っています。いいえ、私たちはそれぞれがキリストにあって一つに結ばれているのです。したがって、からだの一部が苦しめば他も苦しみ、一部が喜べば他も喜びます。

私たちは確かに、今は苦しいかもしれません。絶えず、圧迫があつて、そこから抜け出したいかもしれません。しかし避け所は主であります。そして主が助けてくださること、また自分が主により頼んでいて、一瞬たりとも主から離れて生きることにはできないことを覚える必要があります。この後で、ダビデは痛い方法で主に立ち上がります。けれども、そうする必要はありません。たゆまない努力によって、私たちを救ってくださった主の選びを確かなものにしていくことができます。

最後に分かち合いたいのは、ペテロ第二 1 章 5 節からです。使徒ペテロは継続した霊的な営みを話しています。「こういうわけですから、あなたがたは、あらゆる努力をして、信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。これらがあなたがたに備わり、ますます豊かになるなら、あなたがたは、私たちの主イエス・キリストを知る点で、役に立たない者とか、実を結ばない者になることはありません。(2ペテロ 1:5-8)」ここも同じです。信仰が与えられたら、そこに徳、すなわち信仰を生活の中で生かす作業をします。それには知識が必要です。けれども知識は人を高慢にさせます、自制が必要です。そして自制には忍耐が必要です。それから敬虔を加え、敬虔には兄弟愛、そして兄弟愛に留まらず、愛を加えます。これは絶えることのない過程であり、継続的にやっていくことであります。

そして、彼はこう結論づけます。「ですから、兄弟たちよ。ますます熱心に、あなたがたの召されたことと選ばれたことを確かなものとしなさい。これらのことを行なっていれば、つまずくことなど決してありません。このようにあなたがたは、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永

遠の御国にはいる恵みを豊かに加えられるのです。(10-11 節)「私たちが救われて、御国に入るの
のは確かです。けれども、それが豊かに加えられる、すなわち大胆に、喜んで恥ずかしいところ
がなく入ることができる、ということです。主が戻って来られて、清めの火によって自分の行ないが焼
かれて、けれどもかろうじて救われるというのではなく、大胆に入ることができます。ですから、信
仰の歩みをあきらめないでください。主は真実な方です。御名を呼び求めれば、いつでも答えてく
ださいます！